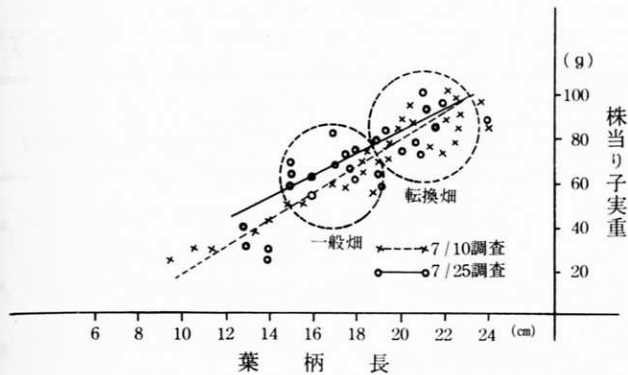


4 む す び

多収に必要な生育量の確保のためには初期生育の促進を図る必要がある。またどん英期以降は最も重要な時期でありこの時期の茎及び葉柄部の乾物%を高めることが着英を良くする。

転換畑は根の活力が良く稔実期間が延長することから粒肥大に好結果をもたらすが、しかしこの期間の二次分枝の多発及び分枝の過剰伸長は着莢を不安定にする。また紫斑粒の多発を招きやすい。

主茎粒数割合が高く、上位分枝（第5位以上）の粒肥大の良い品種及び生育型によって多収が得られるようである。



第3図 葉柄長と子実重との関係

ラッカセイマルチ栽培における病害防除について

野崎 光夫・柳原 元一・井上 徹

(宮城県農業センター)

1 ま え が き

前回の報告では、ラッカセイをフィルムマルチ栽培することにより、裸地栽培に比較して安定した収量が得られ、更に多収を得るためには個体の生育量増大に依存するよりも、株数増による効果の大きいことを明らかにした。

しかし、マルチ栽培においては、初期生育がおう盛で茎葉の繁茂量が多く、そのため灰色カビ病、褐斑病、汚斑病などの病害が発生しやすくなり、その被害程度も大きい。したがってこれら病害の防除は安定多収の

確保に不可欠の要素である。

本報告は、これら病害の防除体系確立のため、昭和46～47年の2か年にわたって検討した結果である。

2 試 験 方 法

試験Ⅰ（昭和46年度）

供試条件を第1表に示した。使用フィルムはホーリーシート 9215, 栽植様式は畦幅 100 cm, 条間 45 cm, 2 条, 株間 15 cm とし, 品種は関東 16 号で, 5 月 13 日に播種した。

第 1 表 供試条件 (試験 I)

(昭 4 6)

[illegible]

試験Ⅱ(昭和47年度)

4日に播種した。

供試条件を第2表に示した。使用フィルムと栽植様式は試験Ⅰと同じで、品種は白油7-3を用い、5月

なお、2か年の病害発生時期と消長を示せば第3表のとおりである。

第2表 供試条件(試験Ⅱ)

(昭47)

区 名	散 布 時 期 (月日)						a当り 散布量	備 考 () 成分含有率
	6.30	7.10	7.20	7.30	8.9	8.19		
ダコニール6回散布	○	○	○	○	○	○	15ℓ	× スクレックス水和剤 1000倍液(30%)
ダコニール+スクレックス 開花前期3回散布	○+×	○+×	○+×	○	○	○	"	◎ トリアジン水和剤 600倍液(50%)
ダコニール+スクレックス 開花後期3回散布	○	○	○	○+×	○+×	○+×	"	○ ダコニール水和剤 600倍液(75%)
マンネブダイセン6回散布	●	●	●	●	●	●	"	● マンネブダイセン水和剤 600倍液(70%)
マンネブダイセン+スクレックス 開花前期3回散布	●+×	●+×	●+×	●	●	●	"	各処理とも小型肩掛噴霧機使用
マンネブダイセン+スクレックス 開花後期3回散布	●	●	●	●+×	●+×	●+×	"	
トリアジン6回散布	◎	◎	◎	◎	◎	◎	"	
トリアジン+スクレックス 開花前期3回散布	◎+×	◎+×	◎+×	◎	◎	◎	"	
トリアジン+スクレックス 開花後期3回散布	◎	◎	◎	◎+×	◎+×	◎+×	"	
スクレックス開花前期3回散布	×	×	×	—	—	—	"	
スクレックス開花後期3回散布	—	—	—	×	×	×	"	
無 散 布	—	—	—	—	—	—	—	

第3表 病害の発生時期と消長

病 名	46年		47年	
	発生始	発生盛期	発生始	発生盛期
灰色カビ病	9月3半旬	9月4半旬～9月5半旬	9月2半旬	9月4半旬～9月5半旬
褐斑病	7月2半旬	8月4半旬～9月1半旬	7月2半旬	8月4半旬～8月5半旬
汚斑病	—	—	8月1半旬	8月6半旬～9月1半旬

3 試験結果

試験Ⅰ

発病調査結果を第4表に示した。灰色カビ病に対する薬剤散布の防除効果は、スクレックス連続散布の発病茎率が最も少なく、効果の高いことが認められた。続いて、スクレックス開花後期3回散布がトリアジン

連続散布と同程度の効果を示して防除効果は高かった。トリアジン・スクレックスの交互散布と、トリアジン、マンネブダイセン混合散布の効果は同程度の発病茎率を示しており、スクレックスの開花前期及び中期3回散布の効果は最も低かった。

褐斑病に対する防除効果では、トリアジン連続散布の効果がやや高く、次いでトリアジン、マンネブダイ

セン混合散布の効果が高く、トリアジン、スクレックスの防除効果は認められなかった。交互散布が続いていた。しかしスクレックス散布によ

第4表 発病調査結果(試験Ⅰ)

区 名	項 目	灰色カビ病(9月28日)		褐 斑 病 (8月12日)				
		発病茎率	全 左 対 無 散 布 比	罹 病 程 度 (%)				被害度
				多	中	少	計	
スクレックス開花前期3回散布	%	24.5	53	3.2	9.3	8.6	21.1	12.2
スクレックス開花中期3回散布		24.8	54	3.9	6.8	8.6	19.3	11.3
スクレックス開花後期3回散布		15.2	33	2.5	6.6	8.0	17.1	10.8
トリアジン・スクレックス交互散布		19.7	42	2.7	6.3	6.9	15.9	9.2
スクレックス連続散布		9.6	20	3.2	7.0	10.7	20.9	10.9
トリアジン連続散布		15.8	34	1.2	4.2	6.7	12.1	6.2
トリアジン・マンネブダイセン混合散布		19.8	43	1.0	5.7	8.3	15.0	7.6
無 散 布		45.9	100	4.0	8.9	7.9	20.8	12.6

注) 被害度の算出は次のとおり行った。

$$\text{被害度} = \frac{3n_3 + 2n_2 + 1n_1 + 0n_0}{3N} \times 100$$

$$N = n_0 + n_1 + n_2 + n_3$$

n_0 : 健全葉数

n_1 : 発病程度小の葉数

n_2 : 発病程度中の葉数

n_3 : 発病程度多の葉数

試験Ⅱ

灰色カビ病、褐斑病及び汚斑病に対する防除効果を第5表に示した。すなわち、灰色カビ病に対してはスクレックス散布の防除効果が最も高く、次いでトリアジン、マンネブダイセン、ダコニールの順となった。しかし、それらの効果はスクレックスに比べてかなり低下し、これらの薬剤の単独処理では灰色カビ病の発生を抑えることは不可能である。スクレックス開花後期3回散布の防除効果は、開花前期3回散布に比べてやや効果の高い傾向がうかがわれ、この傾向は試験Ⅰの結果とほぼ一致した。

褐斑病に対する防除効果は、ダコニール、マンネブダイセン、トリアジンともに高く、特にダコニールの

効果が高いことが認められた。すなわち、ダコニール散布では罹病程度及び被害度ともに無散布区に比べて顕著に減少した。次いで、マンネブダイセン、トリアジンの防除効果はほぼ同程度で、ダコニールに比べて低下した。また、スクレックスの効果は認められず、無散布同様落葉率が高かった。すなわち、褐斑病の発生が多くなるほど早期落葉がはなはだしかった。

汚斑病に対する防除効果は、褐斑病の結果とほぼ同様であった。すなわち、ダコニール、マンネブダイセン及びトリアジンの各薬剤において防除効果が認められ、それらの中でダコニールがやや高く、マンネブダイセン、トリアジンはほぼ同程度でダコニールに比べやや低下した。落葉率も褐斑病と同じ傾向を示した。

第 5 表 発病調査結果 (試験 II)

区 名	項 目		褐色斑病 (9月9日)							汚斑病 (9月12日)						
	灰色カビ病 (9月30日)		発病小葉 1枚当り 病斑数	罹病程度			被害度	落葉率	%	発病小葉 1枚当り 病斑数	罹病程度			被害度	落葉率	%
	発病 茎率	全左対無 散布比		多	中	少					多	中	少			
ダコニール 6 回散布	23.9	96	2.0	0.3	1.1	4.7	41.9	5	2.2	1.8	6.6	4.1	56.0	16		
ダコニール+スクレックス 開花前期 3 回散布	13.7	55	1.6	0.5	2.0	8.3	41.0	13	2.2	1.4	8.7	4.1	55.9	13		
ダコニール+スクレックス 開花後期 3 回散布	13.5	54	2.5	1.1	1.7	4.9	51.0	6	2.3	0.9	5.9	4.2	56.8	11		
マンネブダイセン 6 回散布	20.7	83	5.9	13.3	18.5	13.8	63.2	20	2.4	2.1	11.4	7.9	59.4	29		
マンネブダイセン+スクレックス 開花前期 3 回散布	12.3	49	9.3	16.9	12.8	10.4	65.3	11	2.4	3.8	8.6	5.7	63.2	27		
マンネブダイセン+スクレックス 開花後期 3 回散布	12.5	50	5.2	11.2	14.7	16.8	62.9	17	2.4	1.1	6.1	4.6	63.0	19		
トリアジン 6 回散布	19.6	78	6.6	11.6	11.6	10.6	65.7	15	2.7	3.2	13.4	5.4	62.5	33		
トリアジン+スクレックス 開花前期 3 回散布	11.3	45	7.8	16.0	15.6	12.4	65.0	21	2.6	3.0	18.7	6.3	63.8	36		
トリアジン+スクレックス 開花後期 3 回散布	11.0	44	6.3	16.4	21.4	16.7	64.4	13	2.6	4.5	14.1	5.4	64.9	25		
スクレックス開花前期 3 回散布	8.8	35	22.9	49.2	12.6	4.1	110.8	57	3.7	22.7	21.6	26.7	65.4	76		
スクレックス開花後期 3 回散布	8.2	33	29.4	61.9	5.6	2.1	105.6	55	3.9	27.8	18.6	31.4	66.4	78		
無 散 布	25.0	100	32.1	56.9	4.2	0.8	120.0	63	4.8	40.1	26.7	16.5	76.6	77		

4 ま と め

以上, I~II 試験の結果から, 灰色カビ病に対してスクレックスが極めて有効である。

また褐色斑病, 汚斑病に対してはダコニールの防除効果が高く, 次いでマンネブダイセンとトリアジンの効果はほぼ同程度であるがダコニールに比べやや低下した。

本県のラッカセイ栽培における病害としては, 褐色

斑病, 汚斑病なども重要病害であり, 灰色カビ病とともに防除が必要である。

したがって, 灰色カビ病に対してはスクレックス水和剤 1000 倍液の開花後期散布, 褐色斑病, 汚斑病に対してはダコニール, またはトリアジン・マンネブダイセン各 600 倍液の開花期間散布が有効である。

しかし, スクレックスは製造中止となったので, 灰色カビ病に対する新薬剤の検討が必要である。